

協働スキル研修プログラムの開発と効果評価(その1) — 高齢者虐待対応における実践的研修の開発 —

- 松本葉子(田園調布学園大学)
- 長沼葉月(首都大学東京)
- 副田あけみ(関東学院大学)
- 土屋典子(立正大学)

厚生労働省、各種マニュアル⇒チームアプローチを！

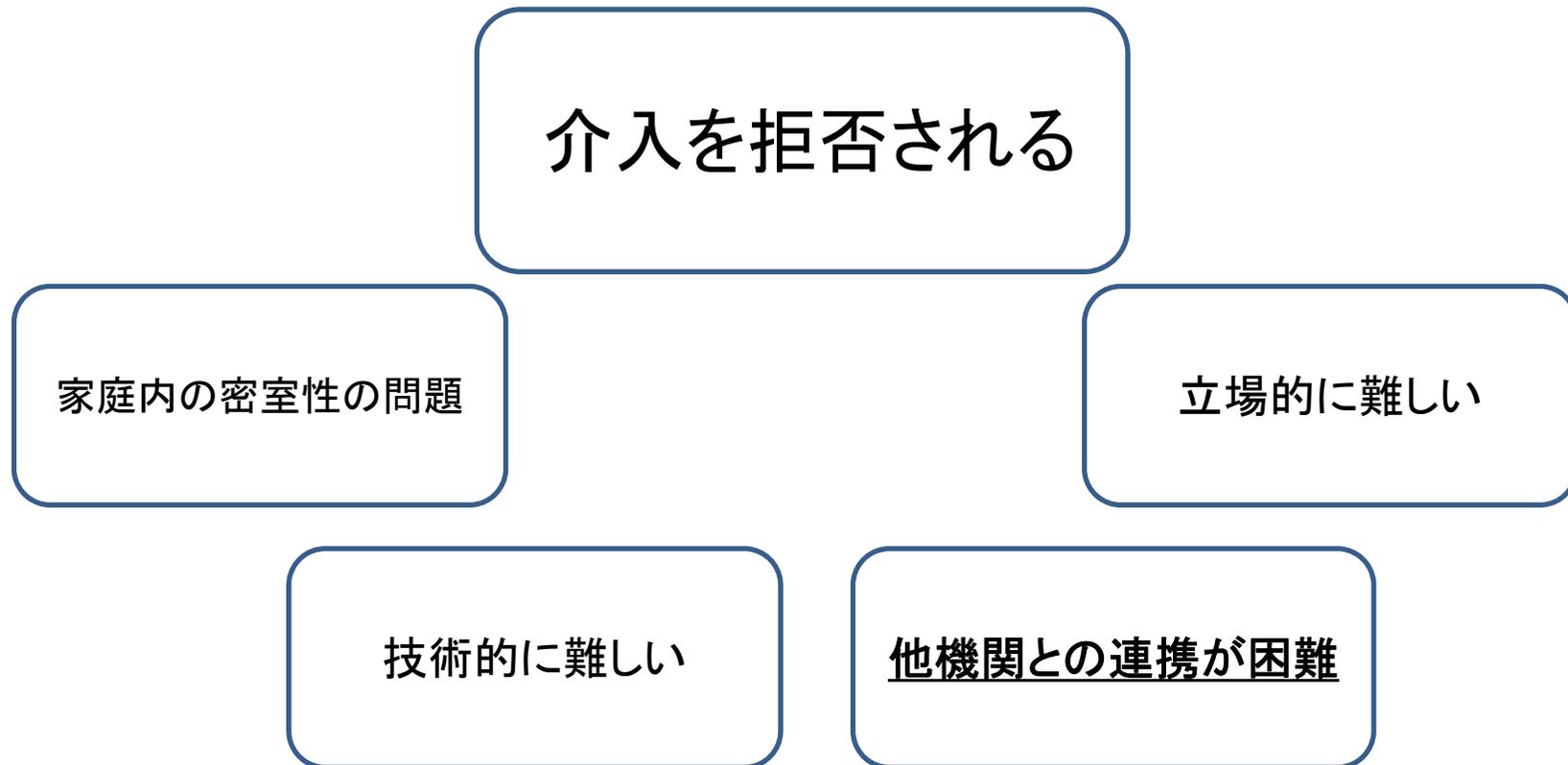
「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査報告」 1,742市町村、平成23年度末現在

市町村における高齢者虐待防止対応のための体制整備等について（14項目）

《項目ごとの実施率》

- ・高齢者虐待の対応の窓口となる部局の住民への周知：8割
- ・独自の対応のマニュアル、業務指針等の作成：約6割
- ・成年後見制度の市区町村長申立への体制強化：7割強
- ・3層の高齢者虐待防止ネットワーク構築：4割強～6割強（14項目中ワースト1, 2）
⇒市町村において今後、特に積極的な取組が望まれる。

高齢者虐待に対応する困難感

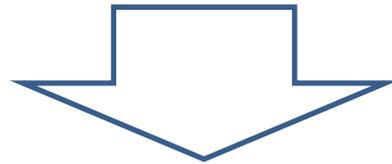


(例) 自治体と委託型包括との関係

- ・情報共有に積極的でない
- ・一緒に動いてもらえない
- ・措置に消極的

問題関心

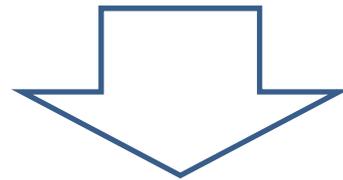
厚生労働省が求める高齢者虐待対応のマニュアルや業務指針、対応フロー図の作成や、3層の介入支援ネットワークの構築だけでよいのか？それらを作れば他機関との連携・協働はうまくいくのか？



高齢者虐待対応における関係機関間の協働を円滑に進めるための活動方法を「協働スキル」と捉え、その実態を明らかにし、実践の現場で役立ててもらいたい。

安心づくり安全探しアプローチ(AAA)研究の経緯

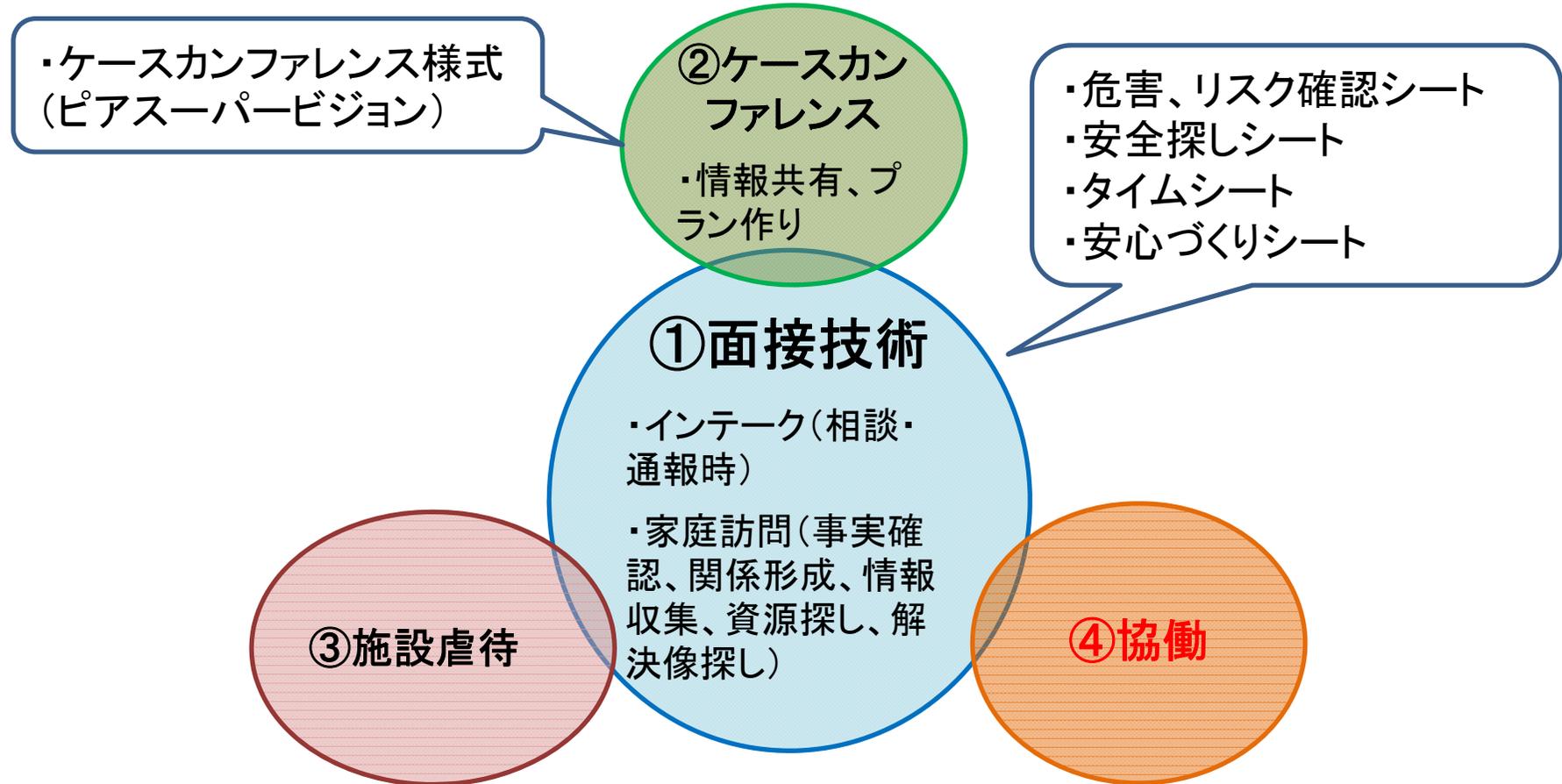
- 援助職の対処可能感の獲得・向上
- 援助職と家族とが話し合える関係性づくり
- 家族の状況変化への動機づけ促進



- 高齢者虐待事例の早期発見・早期介入による再発防止
- 家族全体への支援

⇒ 援助者支援のためのAAAの開発、AAA研究会発足へ

AAAの研究ステップ



本来の目的や立場が異なる機関同士が、共通の目標達成を目指して資源を出し合い、一緒に作業をすること。複数機関がかかわることによって、単一の機関では成し遂げられない課題を解決したり、新たな活動や意味を生み出すこと。ゆるやかなネットワークを組むこと。

倫理的配慮

- アンケート調査およびインタビューは、研修前に目的・内容等を明記した依頼文を配布し、口頭で説明を行い、同意を得た受講者のみ参加
- データ収集、処理についてはプライバシーに配慮、統計的処理
- 首都大学東京倫理委員会による承認、日本社会福祉学会研究倫理指針に則っている

M-D&Dに基づく協働スキル研究

フェーズⅠ

- 【問題把握と分析】
- 2012～2013年度に行った9回のインタビュー分析と文献研究

フェーズⅡ

- 【たたき台のデザイン】※
- トライアル用の協働システム・協働スキル研修プログラムを開発

フェーズⅢ

- 【試行と改良】※
- AAA研究会主催のトライアル研修、研修終了2ヶ月後にフォーカスグループインタビュー、研修デザインの精査

フェーズⅣ

- 【普及と詠え】
- 自治体等主催の協働研修実施、効果評価測定

フェーズ I (問題把握と分析)

【関東地方5つの市区の包括、および行政職員へのグループインタビュー】

◎協働システムにかんするスキルを整理し、一覧表にまとめる(29スキルを群、カテゴリー、コード化)

協働システム構築スキル群(制度的条件整備のため)

協働システム運営スキル群(運用、維持発展のため)

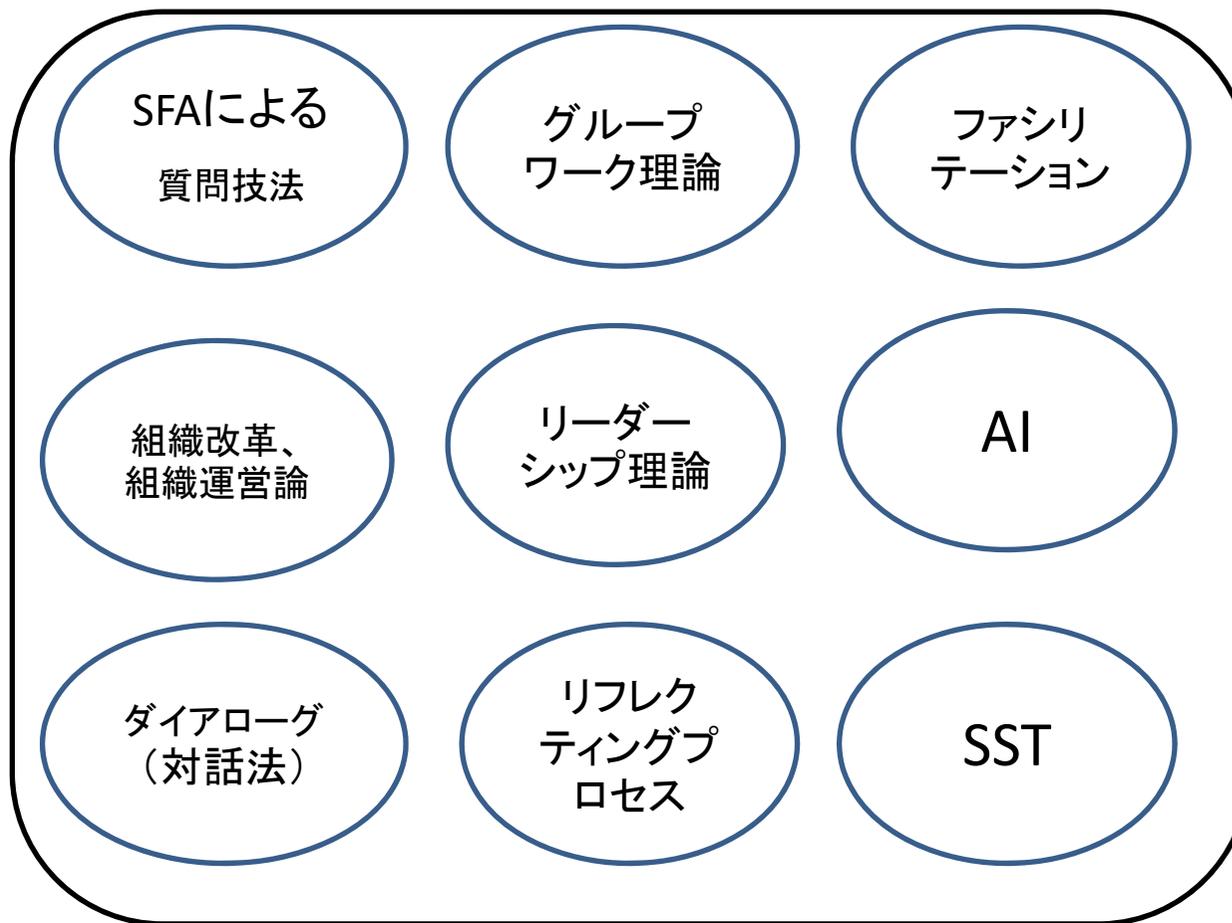
協働システム下のコミュニケーションスキル群

◎文献研究等によるコミュニケーションスキルの精査、AAA研究会内で意見交換をし、一覧表にまとめる(25スキルを3分類)

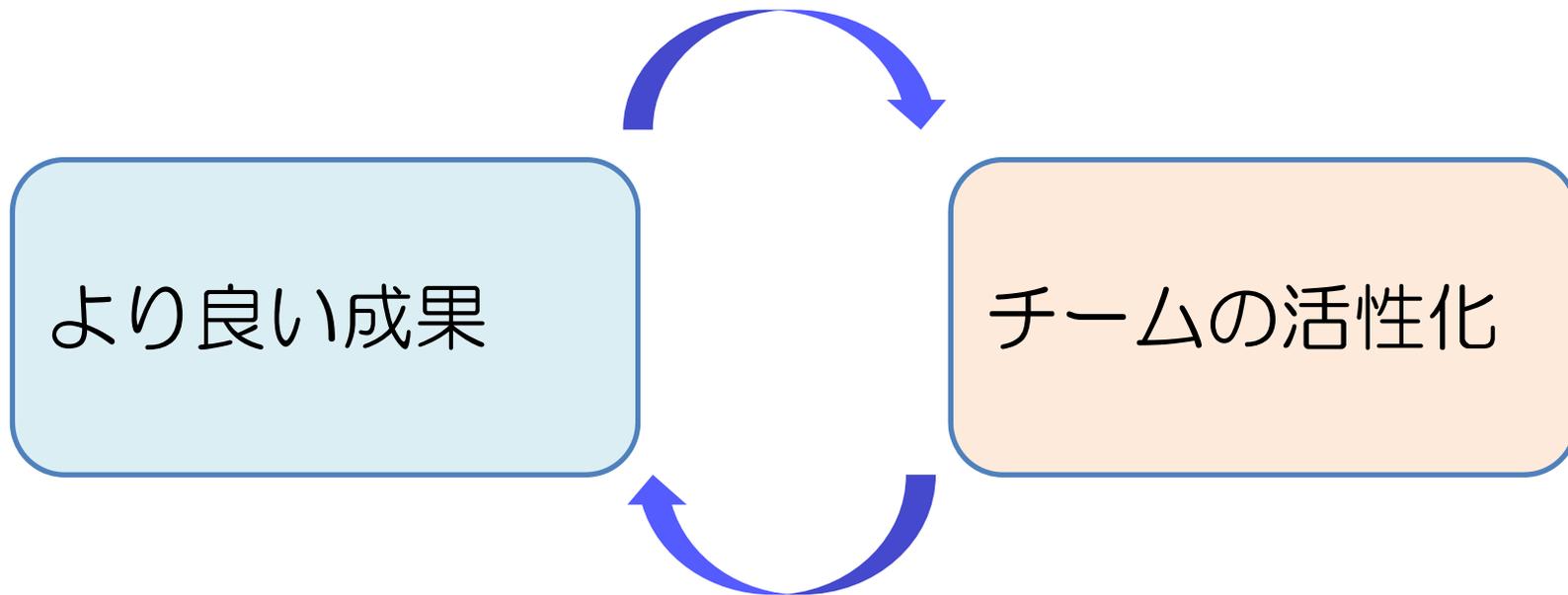
協働のためのコミュニケーション
⇒ファシリテーションを意識する

フェーズⅡ（たたき台のデザイン）

- 研修内では、さまざまな考え方やスキルを採用

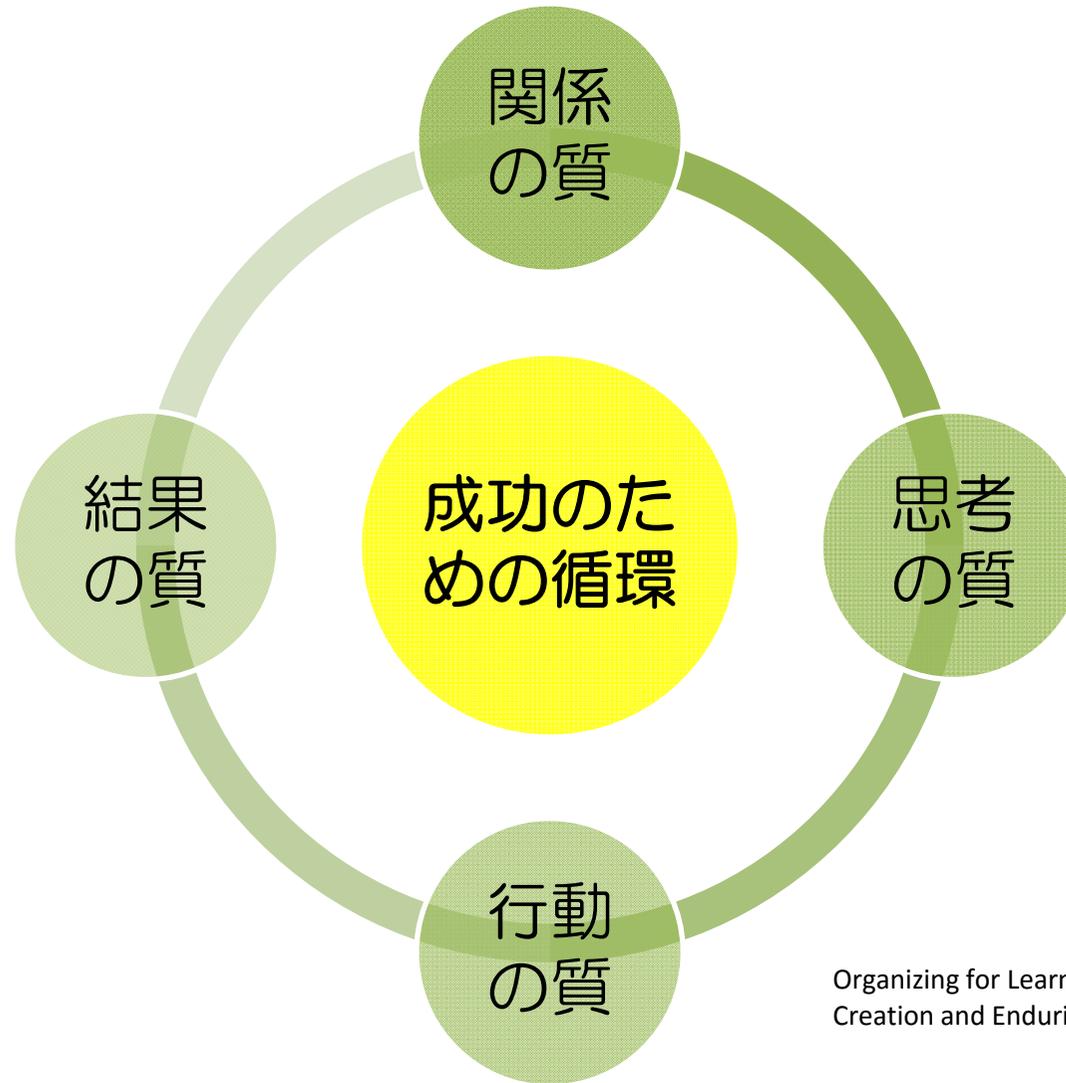


協働のためのコミュニケーション
⇒ **ファシリテーション**を意識する



場のデザインスキル、対人関係のスキル、構造化のスキル、合意形成のスキル

相互に認めあう/肯定的に評価しあう関係性が
やる気アップ&成功へのカギ



Organizing for Learning: Strategies for Knowledge
Creation and Enduring Change
Daniel H. Kim

協働スキル研修内容(講義と演習)

1. 高齢者虐待対応の多機関ネットワークと協働システム

グループインタビューから抽出できた協働スキルの分類(3つの群の説明)
多機関協働による効果的な援助の条件

2. 協働のために必要な姿勢

よりよい協働をめざすには①肯定的思考パターン、②会話のコントロール
協働のためのコミュニケーション=ファシリテーション
組織の内外でものごとをすすめていくときの成功の循環

3. 演習:協働する上での注意

言葉の持つ不確実性、イメージ、言葉の3つのレベル
相手の理解(機関の理解、担当者の理解)

4. 多機関・多職種協働のための

コミュニケーション・スキル: 伝え方を工夫する

伝え方のステップ(理解のすり合わせ、ワンダウンポジション、お願いや協力依頼の方法等)

5. 演習: 伝え方のレパートリーを増やそう

短時間で要領よく、事例の概要を相手に伝える

伝え方一つで協働意識が変わる, プラスのストローク

事例を用いた伝え方の演習

6. 役割分担の落とし穴

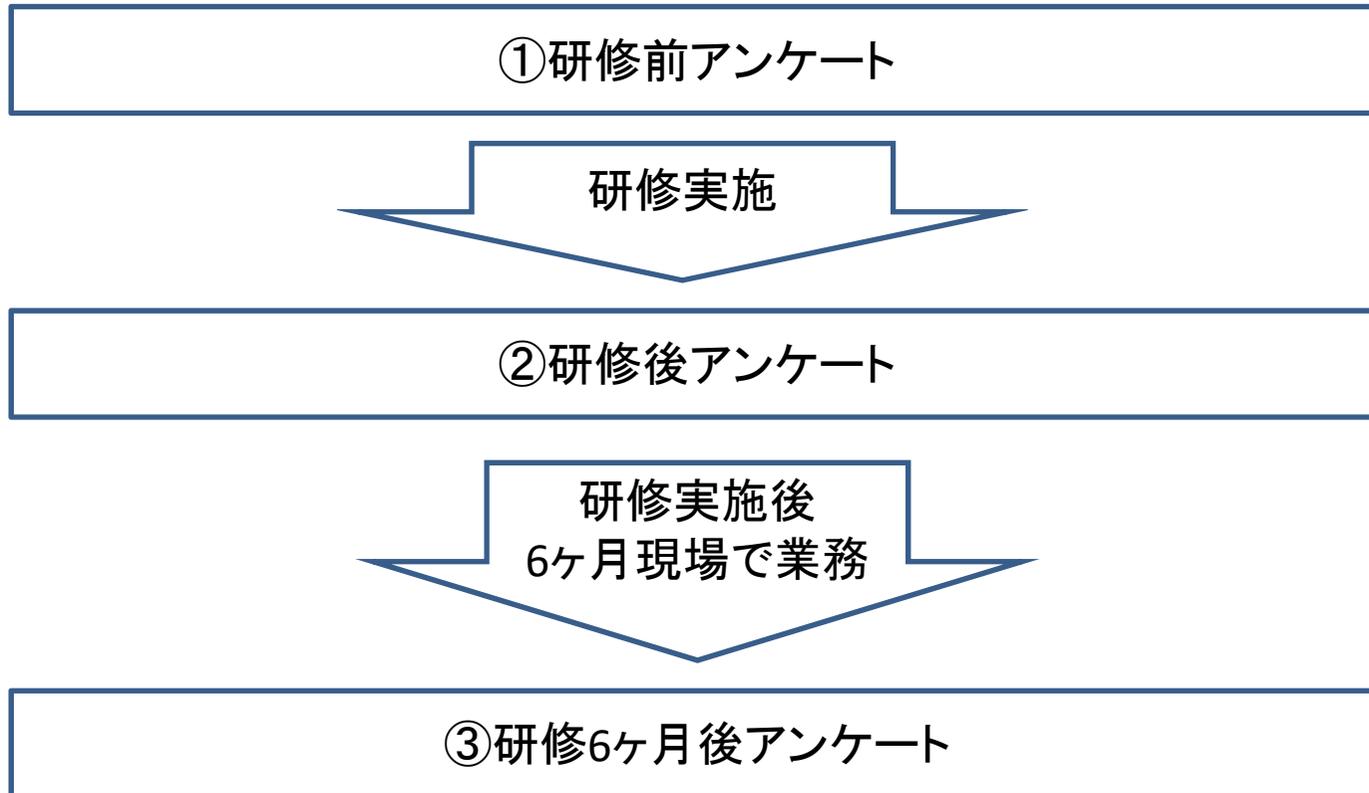
業務の重なりの分担方法

7. まとめ

フェーズⅢ（試行と改良）

- AAA主催のトライアル研修
- 研修2か月後にフォーカスグループインタビュー
→研修内容を修正、変更

評価研究のフローチャート



アンケート調査について

- 筒井の保健医療福祉職における連携活動評価尺度を一部採用(8項目)
- 本研修で学んだ協働スキルについて自己効力感を問う(14項目)
- その他基本属性

研修直後の結果

area と 高齢者虐待をめぐる協働システムとスキルを学ぶ のクロス表

		高齢者虐待をめぐる協働システムとスキルを学ぶ			合計	
		大変良かった	良かった	あまり良くなかった		
area	研修A	度数	31	15	1	47
		area の %	66.0%	31.9%	2.1%	100.0%
	研修B	度数	20	30	0	50
		area の %	40.0%	60.0%	0.0%	100.0%
	研修C	度数	17	7	0	24
		area の %	70.8%	29.2%	0.0%	100.0%
	研修D	度数	18	8	0	26
		area の %	69.2%	30.8%	0.0%	100.0%
	研修E	度数	10	13	0	23
		area の %	43.5%	56.5%	0.0%	100.0%
	研修F	度数	16	9	0	25
		area の %	64.0%	36.0%	0.0%	100.0%
	研修G	度数	17	9	0	26
		area の %	65.4%	34.6%	0.0%	100.0%
合計	度数	129	91	1	221	
	area の %	58.4%	41.2%	0.5%	100.0%	

・地域別に分布の違いに有意差なし

・「大変良かった」が58.4%、「良かった」も合わせると、99.6%

研修6ヶ月後の変化(別紙資料)

- 研修前後のアンケートとIDで個人が特定、連結可能
- 研修6か月後、調査票を郵送配票・回収
 - * 援助者の徒労感や自信等を問う質問
 - * 研修で学んだ協働スキルを使う／使わないことでの変化を問う質問

計12項目

今後の課題

- 協働スキルのさらなる精査
- 協働スキルの理論的基盤の整理、体系化。
協働関係が成熟する発達段階モデル(仮)の構築を目指す。
- 研修を積み重ね、現場の意見を取り入れ、研修プログラムの修正、変更

ご清聴ありがとうございました

安心づくり安全探しアプローチ(AAA)のHP

<http://www.elderabuse-aaa.com/>